英語リスニング教材「らくらくイングリッシュ」による e-Learning英語教育

柏　原　郁　子*

A Development of e-Learning Contents for English Listening Material: "*Raku Raku* English"

Ikuko KASHIWABARA*

Keywords: e-Learning英語教育、リスニング教材、song

１．はじめに

大阪電気通信大学では学生の英語力向上のために2004年にアルク社によるe-Learningシステム ALC Net Academy「スタンダードコース追加版Ⅰ」、「初級・中級コース」を、2005年にはさらに「Power Wordsコース」、「英文法コース」を導入した。e-Learning英語教育を本格的に実施し、授業における効果的な指導についての考察[1)]も公表し、学生の意識調査を行い、そして学生の英語力の伸長度を測ってきた。

しかしながら約6000人の学生全体が率先してALC Net Academyを活用してくれれば良いのだが、このようなe-Learning教材では、なかなか本学学生全体のニーズを満たしてくれているわけではなさそうである。例えば就職試験あるいは大学院進学を意識しながら、数ヶ月以内にTOEICを受験するという状況の学生にあっては、ALC Net AcademyにあるTOEICテスト演習の模擬試験など一所懸命に取り組み、学習履歴時間なども飛躍的に長くなり、当然TOEICのスコアも着実に伸びている。一方、高校受験を終えたばかりの新入生は、就職活動においてTOEICが必要になる現実を説明しても「TOEICってなに？」「就職試験？」という反応が帰ってくる。そんな彼らにスタンダードコースのレベル診断テストを受験してもらうと、判定結果の出来の悪さにますます英語に対して自信を喪失し、ついには， e-Learning教材そのものに非常に悲観的なイメージを持って、アクセスすることさえ拒むことになりかねない。

リスニングに関していえば、高校生時代に英語リスニングの訓練を受けていない学生に取って

＊　大阪電気通信大学工学部人間科学研究センター講師

1)　柏原郁子　「e-Learning教材におけるReading指導法―ALC Net Academyリーディング力強化コースを用いた実践授業―」『人間科学研究』第７号　大阪電気通信大学　2005. 3　pp.99-112

柏原郁子　「e-Learning教材における効果的指導法、ALC Net Academyを用いた実践授業と学生によるアンケート評価」『外国語教育フォーラム』第４号　関西大学　2005.3　pp. 79-92

初級・中級コースの教材も聞き取りも儘ならないので、適切な指導がなければ、みずから進んで学習を継続するのは困難である。e-Learning教材を使用した教育を行う際は、やはり学生のレベルにあった適切な教材を提供できるということ、そして教員サイドの学生に対する適切なコーチングが行われているかどうか、が成功の鍵になるだろう。ALC Net Academyはさまざまな英語力のレベルの学生に対応したソフトであるが、学生からリスニング力が伸びない、という相談も多く、リスニングに特化した教材が必要となっていた。

２．リスニング力の強化のために

初心者がリスニング力強化するためには、ただ長時間バックグランドミュージックのように聞き流していればよい訳ではない。"This", "is", "a", "pen." と一語一語発音されれば聞き取れるのに、ネイティブに普通の速度で話されてしまうと、発話全体が聞き取れずに、全体の意味さえ分からなくなってしまうのだ。

英語が聞き取れない原因として、まず英語のリズムに順応できないことがあげられる。日本語では、どの音節も母音（a、i、u、e、o）が含まれ、例えば「か、き、く、け、こ」の場合には、子音の次に母音が続く（ka、ki、ku、ke、ko)。そのため、英語の音声を聞く際に、日本語を母語とする学習者は無意識に母音の音が聞こえてくるのを期待してしまいがちである。例えば、"back"は英語では/bǽk/で一音節であるのに対し、日本語では「バック」/bakku/となり/b/と/k/の後ろに母音が挿入されることにより２音節の音になる。カタカナ英語が身に付いてしまっていると、自分が認識している音節と聞こえてくる英語の音が合致せず、混乱して発話が聞き取れなくなってしまうことになる。

英語特有のリズムパターンを身につければ、このような状況に陥らず，リスニング力を飛躍的に高めることができると期待できる。どうすれば自然に身につけることができるのだろうか。聞き続けても苦痛にならず，意欲的に取り組める教材はないだろうか。聴き取れるまで何度でも繰り返して聴くのは語学の基本であるのだが、正統的な英語を学ばせたいと願う英語教師にとっては英語放送などのオーセンティックな英語を何とか聴かせようと願うものである。VOAなどはもう既に英語学習者用にサイト（http://www.voa-study.net/index.htm）を用意しており、最新のニュースなど音声ファイルとともにスクリプトもダウンロードが可能となっている。ニュースを英語教材にする際、学習者の英語力がTOEIC200～350レベルであれば１分以上のニュースはまず聴き取れない。再生速度を落としても発話全体を理解するのも難しいであろう。理解できないものを楽しく、何度でも繰り返し聞くよう要求すること自体無理がある。幾度も聞いてニュースを丸ごと覚えようという殊勝な学生は多くない。

しかし歌となれば話は別だ。筆者も高校生時代授業で何を勉強したのかは殆ど覚えてはいないけれど、授業で一回だけ取り上げてくれたThe Carpentersの"Top of the World"だけは歌詞の意味も単語の綴りも分からないけれど、全部諳んじることができたものだ。実は英語のリスニング力をつけるのに必要なのは、この「歌の聞き取り」かもしれない。記憶にあるものしかアウトプットできない事実を考えるとき、記憶にとどめたいと思う教材コンテンツを作ることこそ、学生の英語力向上につながるのではないか、という素朴な気持ちがこの「らくらくイングリッシュ」

を生む原動力になっている。授業時にとる学生の要望には必ず「英語の歌を聞き取れるようになりたい」というコメントがあるが、その気持ちに応えることが、リスニング力をつける早道となるはずだ。e-Learning教材「らくらくイングリッシュ」は、これを実現するために開発したのである。

３．e-Learning教材「らくらくイングリッシュ」

学生の多くが知っているであろうポップソングやロック等を多数とりあげ、とにかく聴き取れるまで何百回も聴いてもらう、というのが目的である。このe-Learning教材はMoodle（Moduler object oriented dynamic learning environment）というオープンソースソフトウェアであり、自由に無償で使用することができる。Moodleを使用すると、Web上でアクセスできるので、インターネットにつなげる環境さえ整えば、大学からでも自宅からでもアクセスできる。大阪電気通信大学では、Moodleを利用して、通信工学科、医療福祉工学科、メディアコンピュータシステム学科など多くの学科が独自のコンテンツ提供している。ここでは「らくらくイングリッシュ」の具体的な構成を紹介しよう。

３－１．まず初期画面ではサイトニュースとして「らくらくイングリッシュを利用するためのユーザ登録手順書」（図１）をあげている。

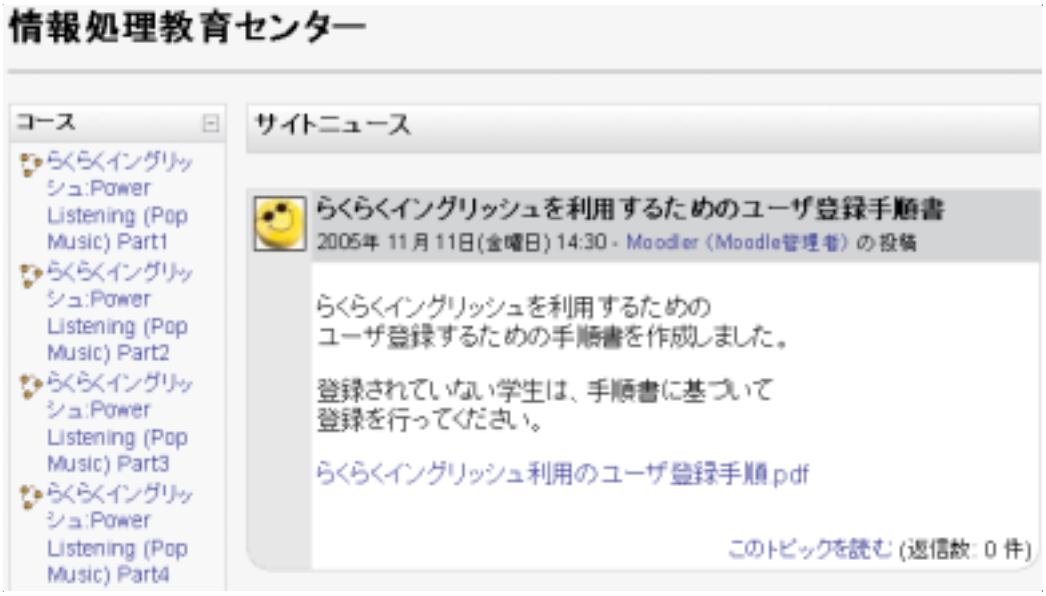

図１　「らくらくイングリッシュ」サイトニュース

３－２．ユーザー名とパスワードによって、このコンテンツに入ることができる受講生を制限している。（**図２**）学習履歴など把握すると同時に、コンテンツに応じてアクセスできる対象学生を限定している。

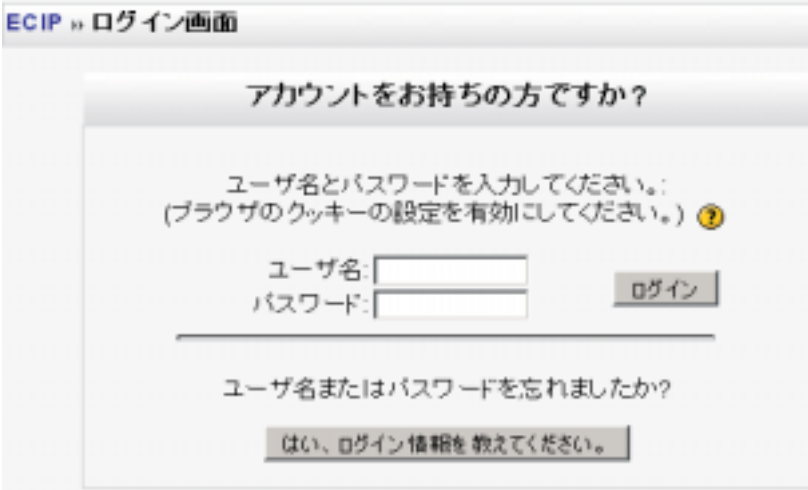

図２　「らくらくイングリッシュ」ログイン画面

初回登録時に表示されるプロフィール編集画面（**図３**）には、名のタグに学籍番号を記入してもらい、姓のタグにフルネームを記載してもらっている。こうすることで学習履歴や成績レポートを確認する作業が格段にしやすくなる。

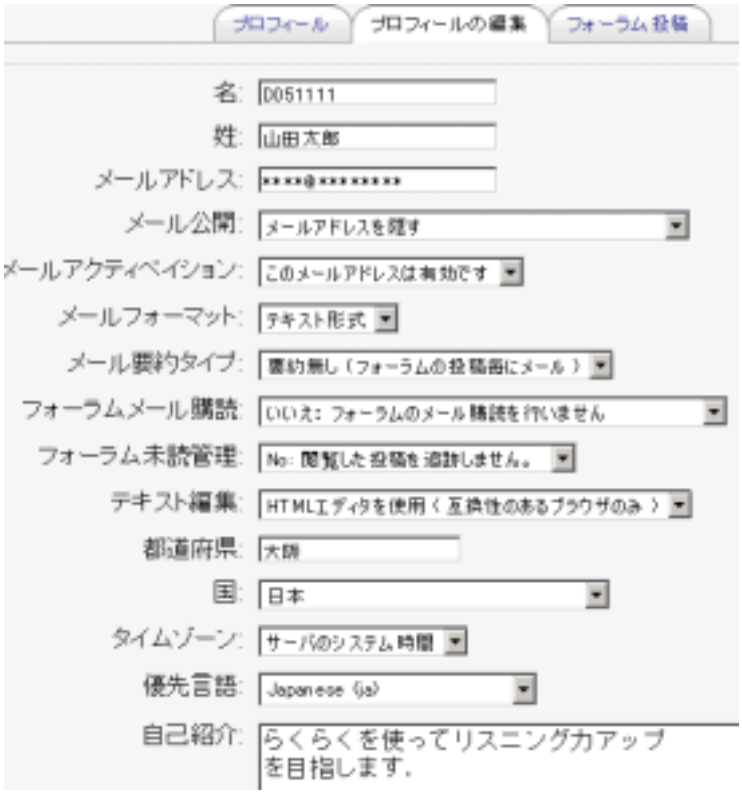

図３　「らくらくイングリッシュ」プロフィール編集画面

３－３．2006年１月現在Part 1（図４）、Part 2（図５）、Part 3（図６）、Part 4（図７） から構成されていて、取り上げているポップソング等は37曲である。本学で筆者が担当している講義「オーラルイングリッシュ１・２」の予習復習にも役に立つように、テキストであげられている曲も取り上げている。

あの名曲を聴きながら、リスニング力アップ！！聴き取れるまで何度も繰り返し聴くうちに、気がつけばあの名曲を英語でスラスラ歌えます。

らくらくイングリッシュの利用手順を作成しました。
手順書をよく読んでリスニング問題にチャレンジしてください。

らくらくイングリッシュの利用手順.pdf

1 Queen : I was born to love you
2 Oleta Adams : Get Here
3 Robbie Williams : Have You Met Miss Jones?
4 Chicago : Hard To Say I'm Sorry
5 Stevie Wonder : ISN'T SHE LOVELY
6 The Beatles : Nowhere Man
7 Vanessa Williams : Save the Best for Last
8 Ben King : Stand by Me
9 The Beatles : Yesterday
10 Elton John : Your Song

図４　「らくらくイングリッシュ：Power Listening」Part 1

1 Michael Bolton : When a Man Loves a Woman

2 Sarah Brightman : Love changes everything

3 Norah Jones : Come Away With Me

4 Aerosmith : I Don't Want to Miss a Thing

5 The Carpenters : Yesterday Once More

6 Olivia Newton-John : Have You Never Been Mellow

7 Des'ree : Life

8 Harry Nilsson : Without You

9 Diana Ross : If We Hold On Together

10 Eric Clapton : Change the World

図５　「らくらくイングリッシュ：**Power Listening**」**Part** ２

1 ABBA : Dancing Queen

2 Mariah Carey : HERO

3 Harry Nilsson : Everybody's Talkin'

4 Enya : Only Time

5 Wham! : Last Christmas

6 Celine Dion : To Love You More

7 Celine Dion : My Heart will Go On (Love theme from 'Titanic')

8 Diana Ross : Reach Out and Touch

9 Elton John : Candle in the Wind 1997

10 Bob Dylan : Blowin' in the wind

図６　「らくらくイングリッシュ：**Power Listening**」**Part** ３

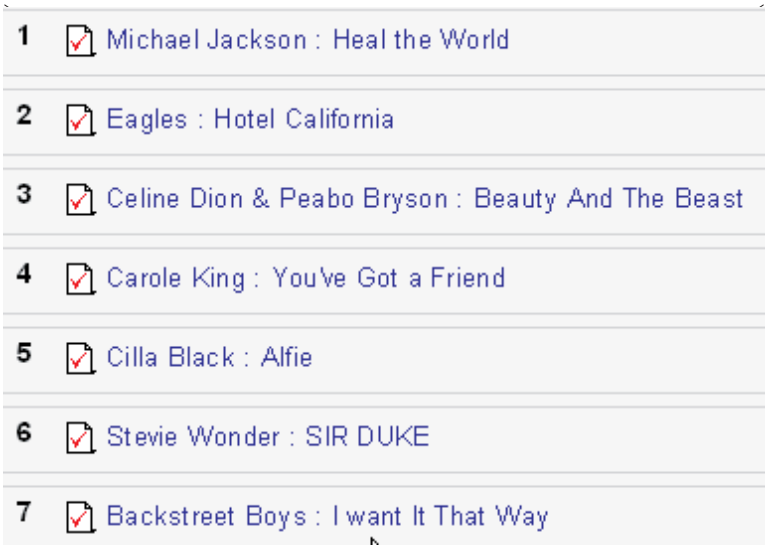

図７　「らくらくイングリッシュ：Power Listening」Part ４

３－４．では実際に学生がリスニング力をつけるためにどのような構成になっているのか、画面を参照しながら説明していく。例えば、Part １の３．**Robbie Williams : Have You Met Miss Jones?** をクリックしてみると**図８**に示す画面が表示される。

図８「らくらくイングリッシュ」Part1 No3. Robbie Williams : Have You Met Miss Jones?

「プレイヤーを再生して、空欄に入る英語を書き取ってみよう。聴き取れるまで何度でも繰り返し聴くのがポイントです。歌いながらやれば楽しさ倍増。Let's try!!」と記載している。指示文左下にある再生ボタンを押せばファイル化した曲が再生される。再生ボタンを押すと、右のレバーが曲の進行に従って右にスライドしていくが、聴き取れない箇所がある場合、レバーを左に戻せば聴き取れなかった箇所に戻る事ができ、繰り返し聞くことが可能である。

曲を聴きながら、空欄にはいる単語をキーボードで打ち込んでいく。タブキーを用いると、空欄から次の空欄にスムーズに移動できる。曲を初めて聴く場合、曲全体を一度通しで聴いてみる方が全体のイメージをつかめるので、空欄が全部埋まらなくても気にしないでもらいたい。空欄に単語を入力している途中の画面は**図９**のようになる。

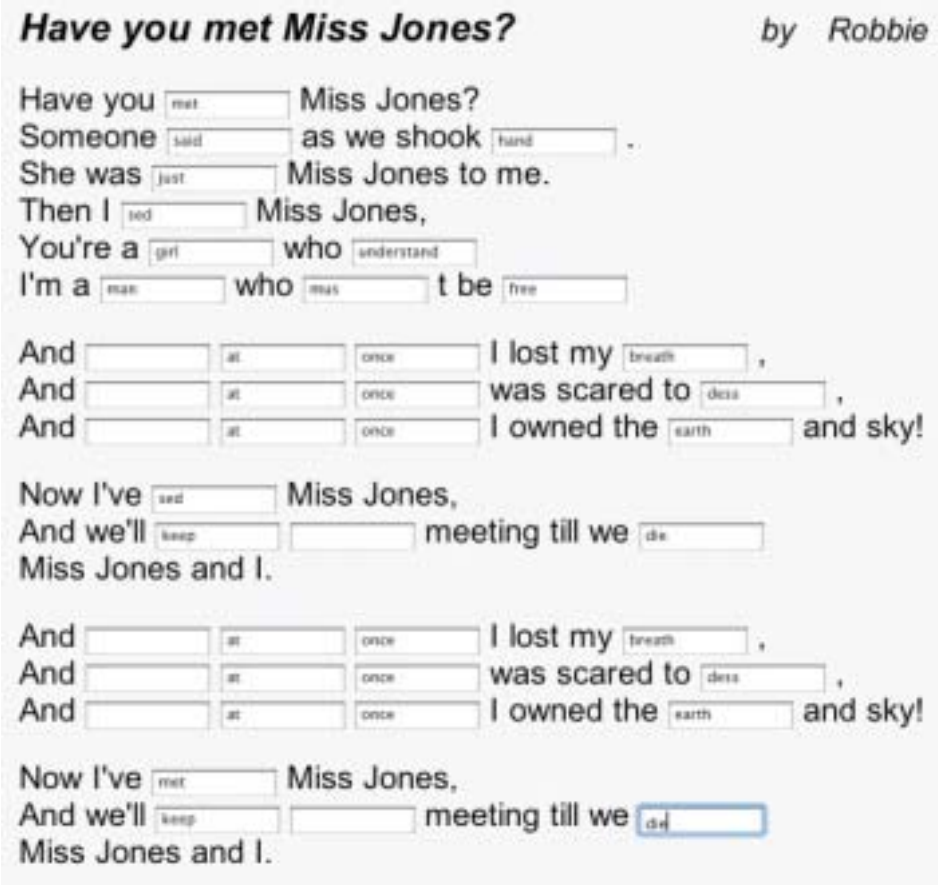

図９　3. Robbie Williams : Have You Met Miss Jones? 解答途中画面

可能な限り空欄に単語を入力した後、画面下にある「解答を採点（提出）」するボタンをクリックすると、**図10**の画面が表示される。グリーンで示されている部分は正解であり、赤で示されている部分は不正解である。このように瞬時に自分の解答の正解、不正解が分かるだけではなく、フィードバック機能として、間違った部分にカーソルをあてると、**図10**で示されているように模範解答が示される仕組みになっているので、「解答が分からない」という不満は残らない。

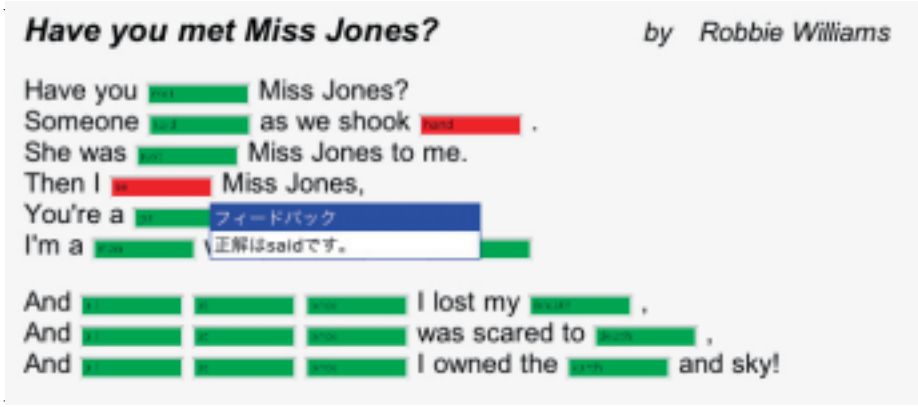

図10　3. Robbie Williams : Have You Met Miss Jones? 採点画面

4.「らくらくイングリッシュ」でマスターできる英語の音声変化

学生のリスニング力を伸ばすために、現実に発話される英語においてどのような音声変化が起きているのかを、「らくらくイングリッシュ」で学習できるよう工夫している。ここでは具体的に「Part 2. No.6 Olivia Newton-John: Have You Never Been Mellow」（図11）について、どのような音声変化を取り上げ、どのように配置されているのか詳細に述べていきたい。

図11「らくらくイングリッシュ」Part 2. No.6 Olivia Newton-John : Have You Never Been Mellow

第１パラグラフの聞き取りのポイント

There was a time when I was	line 1
In a hurry (as) (you) are	l. 2
I was (like) (you)	l. 3
There was a day when I just	l. 4
Had to tell my (point) (of) (view)	l. 5
I was like you	l. 6
Now I don't mean to make you frown	l. 7
No, I just (want) (you) to slow down	l. 8

①－１　変化する音：子音[z]＋半母音[j]→[ʒ]：ある二つの音が隣り合うと、本来聞こえてくるはずの音が、まったく別の音に変化するものがある。ここでは語末にある子音が、次に続く半母音[j]と結合して、ひとつの破擦音に変わってしまう。

as you [əz] + [jú] → [əʒú]　　line 2

①－２　変化する音：子音[t]＋半母音[j]→[tʃ]：子音[t]＋半母音[j]が結合し、破擦音[tʃ]に姿を変える。日常会話でも歌詞においても、you「あなた」が頻繁に出てくることになるので、この変化する音に慣れる必要がある。

No, I just (want) [wɑ́nt] (you) [jú] → [wɑ́ntʃ]　line. 8

②－１　つながる音：子音[k]＋半母音[j]：語末の子音[k]が次の語の語頭半母音[j]とが結びつき、音が変化し、一語のように聞こえる。

I was (like) [láik] ＋ (you) [jú] → [láikjú]　line 3

②－２　つながる音：語末の子音＋母音＋子音＋子音：ここでは語末pointの子音[t] がof [əv]とつながり、そして語末の子音と、続く単語の語頭が同じ子音であるため、前の[v]が後ろの[v]に吸収され一つの子音として発音されるため、３語が１語のように発音される。このように子音＋母音の音がつながることによって複数語句が１語のように発音されることが多いので注意が必要。

(point) [pɔ́int] ＋ (of) [əv] ＋ (view) [vjúː] → [pɔ́intəvjúː]　　line.5

第２パラグラフの音声変化のポイント

Have you never been mellow	line 9
Have you never (tried)	l. 10
To find a comfort from inside you	l. 11
(Have) (you) never been happy	l. 12
Just to hear your (song)	l. 13
Have you never let someone else be (strong)	l. 14

②－３　つながる音：子音[v]＋半母音[j]：語末の子音[v]が次の語の語頭半母音[j]とが結びつき、音が変化し、一語のように聞こえる。

(Have) [həv] (you) [ju] → [həvju] never been happy　　line. 12

③　聞こえにくくなる音：語末の「破裂音」[t], [d], [b], [p], [k], [g]は、文字で表されていても、実際の会話や歌では語末にこれらの音がある場合、一旦口を閉じた部分を開いて息を出すところが、十分に息が吐き出されず、音が聞こえにくくなる。過去形である語末の[d]についても同様である。

Have you never (tried) [tráid]（下線部が聞こえにくくなる）　line. 10

④　脚韻を踏む音：歌の場合，詩行の特に末尾部分の音が同一である場合が多い。というのも、歌を歌う際，詩行の音韻がそろっていると、リズムがとりやすく、歌いやすく、そして記憶に残りやすいのだ。歌を聞く場合、文末の語がとれない場合は、脚韻を踏んでいるかどうか確かめる習慣をもつようにしたい。このll. 13-14も詩行の行末に同じ音韻をそろえている。

Just to hear your (song)　[sɔ́:ŋ]　line. 13
Have you never let someone else be (strong) [strɔ́:ŋ]　line. 14

第３パラグラフの音声変化のポイント

Running (around) as you do	line 15
With your head (up) in the clouds	l. 16
I was like you	l. 17
Never had time to lay back	l. 18
Kick your shoes off, (close) (your) eyes	l. 19
I was like you	l. 20
Now you're not (hard) to understand	l. 21
You need someone to (take) (your) hand	l. 22

②－４　つながる音＋③聞こえにくくなる音：語末にある子音が次に続く語の母音につながって新たな音として聞こえてくる。また語末に破裂音[d]があるための音が聞こえにくくなっている。

Running (around) as you do　line 15
[rʌ́niŋ] + [əráund] → [rʌ́niŋəráund]　（下線部が聞こえにくくなる）

With your head (up) in the clouds　line. 16
[hed] + [ʌ́p] → [hédʌ́p]　（下線部が聞こえにくくなる）

①－１　変化する音：子音[z]＋半母音[j]→[ʒ]：第１パラグラフline 2で取り上げた音声変化と同じで、語末にある子音[z]が、次に続く半母音[j]と結合して、ひとつの破擦音[ʒ]に変っている。会話、歌において"you"が頻繁に使用されるので、この音声変化も多々現れる。

Kick your shoes off, (close) (your) eyes　　line. 19

[klóuz] + [júər] → [klóuʒúər]

③　聞こえにくくなる音：語末の [t], [d], [b], [p], [k], [g] これらの音は頻繁に出てくるので、無意識のうちに語末の子音を予測できるようになりたい。

Now you're not (hard) to understand　　line. 21

[hɑ́ːrd] [tə] → [hɑ́ːrdtə]

②－１　つながる音：子音[k]＋半母音[j]：語末の子音[k]が次の語の語頭半母音[j]とが結びつき、音が変化し、一語のように聞こえる。同曲の３行目においてlike + youの音声変化を取り上げているが、同様の音声変化を他の単語の組み合わせで取り上げ、この変化に耳が慣れているか確認できる。

You need someone to (take) (your) hand　　line. 22

[téik] + [juər] → [téikjuər]

以上のような音声変化を全曲を通して学習し、何回も聴きながら、空欄に記入することを繰り返し、自然に英語の音声変化、そしてリズムに慣れるよう工夫している。

５．e-Learning教材「らくらくイングリッシュ」を活用した効果的な授業運営

演習室などでパソコンにアクセスできる環境が許されるなら、リスニングの授業時などで使用すると学生たちの英語リスニング学習に対する意欲はさらに増すとともに、実力も大幅にのびる結果となる。そのために以下の指導手順で授業を運営したが非常に有効であったので紹介したい。

１）歌の選曲

演習室等で取り組む場合、学生の意思にまかせ好きな曲を聴くのではなく、教員側で学習したいリスニングの音声変化を意識して、一曲のみ取り組むことにする。あくまで副教材と使用するのであれば、次の手順で行う。

２）選曲した歌にある音声変化がどのようなものなのか、口頭で説明。

学生には画面下にある〔解答を採点（提出)〕を押すまで、聴き取りにくい音声変化を何回でもクリックしながら、聴き取りをするよう伝える。その際、ネットにアクセスできるのなら辞書サイトを利用することを奨励している。歌詞の文脈の前後関係から、括弧内にはいる単語の予測がつくという意味で、この作業がリーディングを行う際にも役に立つからである。英和、和英相互の辞書を引きつつ文脈にあう単語探しを行うのは苦痛でもなんでもなく、むしろ自分の予測があっている場合などは楽しい作業となる。単語がわからなくて辛いという学生も、未

知の単語が予測できるということでいかに辞書が必須のツールであるか気づくことにもなる。パソコンで辞書ソフトにアクセスできない場合は、電子辞書を引くことを奨励してもらいたい。

3）辞書を引きながら、「らくらくイングリッシュ」の穴埋めを行ってから〔解答を採点（提出)〕押してもらう。ここで学生に対して、フィードバック機能を駆使しながら、同時に歌を聴き、歌うことを勧めている。リスニング力の高い学生に対しては、歌詞を見ずにシャドウイングの要領で歌を歌ってもらっても良い。この学習を通して、インプットとアウトプットを同時に行うことができ、歌詞そのものの記憶を確実なものにできる。

4）再度〈もう一度〉を押してもらい、同じ曲の聴き取りを行う。その際、辞書等は一切引かずに取り組むことが大切である。

5）学生が「らくらく」に取り組んでいる間、教員は教師権限でアクセスし、どれくらいの学生が〔解答を採点（提出)〕を押して採点を済ませているのか確認する。初回の採点の結果は低くても構わないのだが、２回目、そして３回目の採点結果には注意を払っている。課題に費やす時間もこの２回目、３回目の得点如何にかかってくるからだ。３）の過程が十分である場合、２回目でクラスの２割近くの学生が80％以上の解答率を得ている。その段階で課題を終了し、100％の解答率を得た学生の名前を読み上げている。学生は名前を読み上げられることで、自分の努力を認められているという意識が、授業に集中させていると思われる。全員が満点を取るのを待つ必要は一切ない。満点を取るまで自宅で取り組んでもらえばそれで構わない。ただ自宅での課題を義務づける場合は教員側からのフィードバックを忘れないようにしたい。学生は教員のコーチングをかなり期待しているのだ。

６．学生のe-Learning教材に対する反応

一般教室においてはある単語の意味を説明する場合、辞書にある単語の意味、そして例文も教員側が板書するしかない。しかし演習室に備えている教材提示装置があれば、教室の照明を暗くしなくても、教員側の電子辞書をすぐさま提示できるし、例文もわざわざ教員が板書する必要はない。沢山の例文を一挙に提示したいのであれば、Web辞書英辞郎を送出モニターで提示すれば良い。授業ではこのような環境で毎回「らくらくイングリッシュ」にアクセスしてもらい、e-Learning教材に慣れ親しんでもらった。そのような授業でヒアリング指導を行うと、学生への教育効果は向上できたのであろうか。授業は全ての学生がネットにアクセスできるパソコンを備え、またDVDなどを学生の机上にあるモニターに出力できる環境が整っている演習室で実施した。「らくらくイングリッシュ」を授業で使用した１回生99名（医療福祉工学科、デジタルゲーム学科、メディアコンピュータシステム学科)、３回生20名（電子材料工学科、電子機械工学科、機械工学科）合計119名のアンケートの結果をもとに述べてみる。**図12**には、オンライン教材を授業で使用したことに対する質問のアンケート結果を示す。

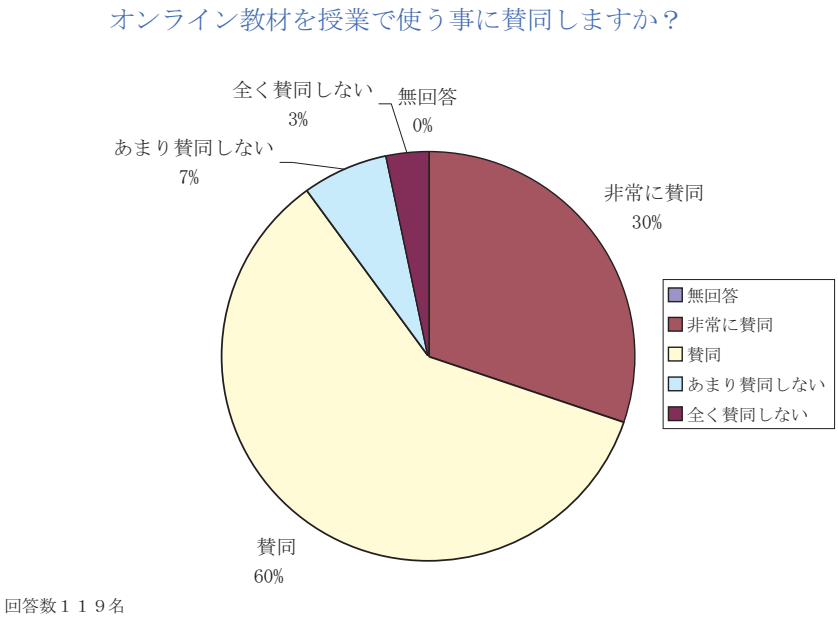

図12　オンライン教材を授業で使う事に賛同しますか？

一回生がアンケートの主な対象であったことから、高校時代とは違った形態の授業に新鮮みを感じていたのかもしれない。90%の学生がオンライン教材を授業で使うことに賛同している結果は、今後の学習指導の指標になると思われる。学習に対する意欲が教室環境でどのようにかわるのかを示した結果は**図13**である。

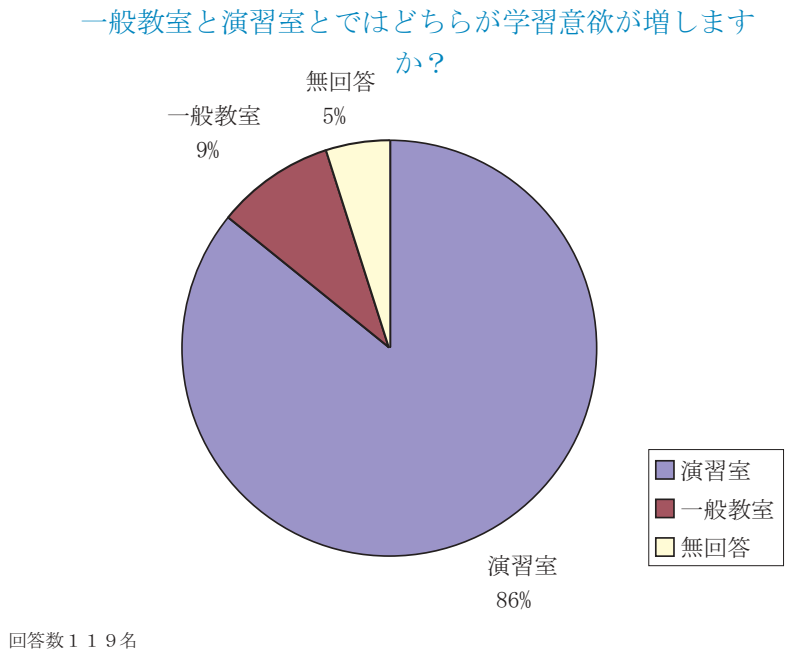

図13　一般教室と演習室とではどちらが学習意欲が増しますか？

一般教室でヒアリングの指導をしているとき、個々の学生のレベルに応じて聴く回数を増やしたり、聴き取れない場所を特定し何回も繰り返し音声を流すことがきなかったが、学生にとってもパソコンで何度でも繰り返し聞く事はできるし、瞬時に採点できるし、間違ったところはフィードバック機能で解答が分かるなど、一般教室では味わえない充足感があったと思われる。語学優先のLL教室やCALL教室を増設するのは、工科系の大学では一般に困難であるが、学生の学習意欲は、充実した教室環境によって培われるものである。

この教材に対し、学生は興味深いと感じたかどうかは**図14**に示される。

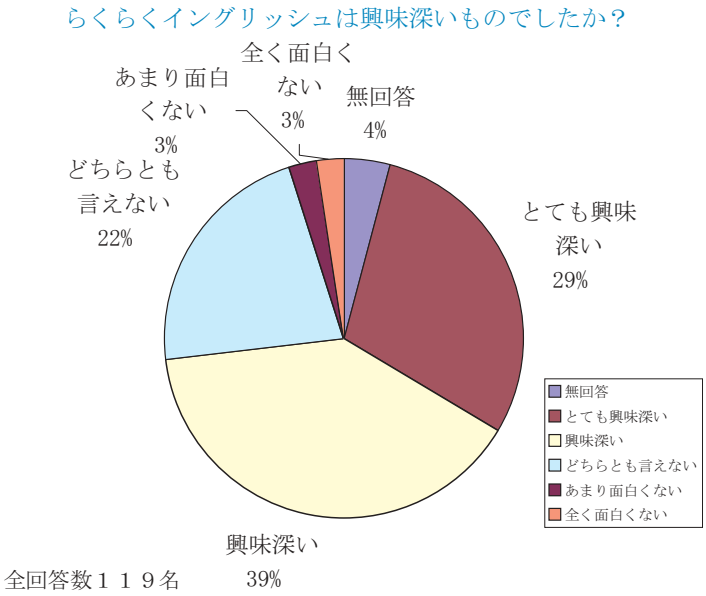

図14 「らくらくイングリッシュ」は興味深いものでしたか？

TOEICの受験を控えた３回生のクラスでは、高い興味を維持できるのは、聴けば聴くほど得点が上がっていくのが手に取るように分かるからだろう。以下に学生から寄せられた意見の一部を列挙する。

《１回生》

・「らくらくイングリッシュ」は何度も聞きながら問題をやって見たら語学に興味が持てるようになってきたのでおもしろかったです。（デジタルゲーム学科）

・聞きとれなかった点を何度も自由に聞けたのがよかった。（デジタルゲーム学科）

・らくらくイングリッシュは個人的に好きでした。元々音楽を聞くのが好きなので楽しくできました。（デジタルゲーム学科）

・どうせ作るならコースを増やすよりレベルを作って穴の空いたスペースを増やしたり、次同じ問題を選択しても穴のあいた場所がかわっている方がいい。どれもこれも大変興味深いものでした。（デジタルゲーム学科）

・自宅でも手軽に授業と同じような感じで勉強ができるのがとてもよかった。（メディアコンピュータシステム学科）

・楽しみながら曲を聞き、英語を覚えることができるので大変よいと思います。（医療福祉工学科）

《３回生》

・「らくらく」のおかげでだいぶ英語が聞けるようになりそれなりの成果を感じた。
（電子機械工学科）

・思っていたより英語の勉強になったのでこれからも使っていきたいと思いました。
（電子機械工学科）

・らくらくイングリッシュは楽しく、聞きとる力がついた気がします。　（電子機械工学科）

・毎週楽しみで、どんな歌がきけるかわくわくしてやらせていただきました。
（電子機械工学科）

・いろんな曲を聴きながら英語の聞き取りの練習ができるのはとても楽しくて、とてもやる気が出ました。英語を聞くのが楽しくなって、良かったです。　（電子材料工学科）

Moodle上で起動しているので、自宅からもアクセスでき、授業と同じ環境でリスニング学習できることのメリットを感じている学生も多くいるようである。10月から１月末までのアクセス数は，2787回であり、一人平均20回以上はアクセスしたことになり、リスニング力向上のための学習に時間を費やしたのである。

７．まとめ

一般にe-Learning 教材は、インターネットにアクセスすれば、いつでも学習できる環境を提供できるという長所があるが、その一方で、学生がアクセスしなければ存在価値がなくなってしまうという欠点もある。特に英語リスニング力を向上するためには、英語特有のリズムパターンと音声変化に慣れることがポイントであり、そのためには聴き取れるまで何度でも繰り返し聞かねばならない。教材の内容に魅力がなければ、学生のモチベーションを保つことができず、教育効果も期待できない。本稿で紹介したe-Learning 教材「らくらくイングリッシュ」は、英語リスニング教材として学生の興味を引き、数ヶ月の間に多くのアクセスを得ることができた。たとえ英語に苦手意識を持っていても、「らくらくイングリッシュ」は学生たちに聴き取りの練習を楽しくさせ、意欲的に取り組むきっかけを与えたようである。

今後、「らくらくイングリッシュ」が効果的なe-Learning教材として定着していくためには、データの更新を怠らないことが不可欠である。更新がなければ、次にどんな曲が入っているのかと楽しみにしている学生の学習意欲をそぐことにもなりかねない。またレベルに応じた選曲が可能な構成にしていくことができれば、より効果的な学習環境を提供できるであろう。さらに学生のコメントにもあるように、いつも決まった歌詞の単語を穴埋めするだけでなく、アクセスする毎に空欄がシャッフルされるなどの改良も望まれる。そんな「らくらくイングリッシュ」を毎回100％書き取れるようになれば、学生はおそらく歌詞を見ずに全曲ディクテーションができて、リスニング力も飛躍的に伸びているはずである。

「らくらくイングリッシュ」開発にあたり、ご協力いただきました大阪電気通信大学情報処理教育センターの早野秀樹氏、村上佑樹氏に感謝いたします。

参考文献

柏原郁子　「e-Learning教材におけるReading指導法―ALC Net Academyリーディング力強化コースを用いた実践授業―」『人間科学研究』第７号　大阪電気通信大学　2005. 3　pp. 99-112

柏原郁子　「e-Learning教材における効果的指導法、ALC Net Academyを用いた実践授業と学生によるアンケート評価」『外国語教育フォーラム』第４号　関西大学　2005.3　pp. 79-92

Nobuhiro Kumai and Stephen Timson, *Hit Parade Listening Second Edition -Developing Listening Skills Through Rock and Pop* (Tokyo : MacMillan Languagehouse, 2003)

Takanori Hayasaka and Hidechika Matsui, *Perfect Listening* (Tokyo: Asahi Press, 2003)